

# 意識の無意識化

森田正馬（まきたけ）という人物がいる。大正年期、日本における精神医学の草創期に「森田療法」として知られる独自の療法を編み出し、神経症者の救済に顕著な業績を上げた臨床医である。ドイツ医学の強い影響下で開始された官学主導の権威主義的な日本の医学界にあつて、正馬の学説が顧みられることはなかった。しかし、在野の志操（しそく）高き臨床医の多くが集い、この療法は現在でもなお広がりを見せている。

正馬は神経症をこう捉える。すなわち神経症とは、特定の病覚に主観的にとらわれて膠着（ちやくちやく）した心の状態である。そのとらわれから放たれて精神が流露（りゅうろう）していくとともに神経症は消失する。神経症の治癒（ちゆ）とは、症状に対する「とらわれ」からの解放であつて症状それ自体が消滅することではない、という。

例えば心悸（しんき）亢進（かうしん）性の神経症の症者には、これが治癒した後でも、心臓は鼓動をやめることはないから、死の恐怖それ自体が人間の心の底から去つてしまふことはない。不安は恒常的なものだといわざるをえない。心悸亢進を何度か経験し、これを恐怖し

渡辺利夫（わたべりお）（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職）。

た人から、恐怖を完全に拭（ぬぐ）い去ることはできない。症状自体は存在していても、それにのみにとらわれるのではなく、生の欲望にのつとつて人間としてなすべきをなすという態度が形成されること、これが神経症の治癒である、と正馬は繰り返す。逆説的にいえば、人間生活をまっとうする過程で、起こるべき時期と境遇に応じて起こる感情のすべてにとらわれて、一点への執着から離脱することが肝心（かんじん）だといふのである。

神経症とは、過度の意識性が特定の一点のみに局限され、その一点以外への意識性が希薄化した心の状態である。したがつて、人間感情のすべてに意識が万遍なくゆきわたり、特定の一点への意識集中が相対的にその「水位」を下げていくことが、すなわち神経症の治癒なのである。症状が消えるのではない。症状は探し出せばまごうことなく存在する。しかし、それへの意識がなくなることで、これが治癒である。正馬にとつての神経症の治癒とは、帰するところ「意識の無意識化」に他ならぬ。